

世界遺産構成資産高山社跡の動向、その実像と課題

軽部 達也*

「高山社跡」は世界遺産の構成資産候補に挙げられたタイミングで、それまで周知度が低かったこともあり、高山社の業績や高山長五郎、町田菊次郎などを知り、市民レベルでも語れることを目標にした5年間であったと思われる。

その間、文化財保護課は建造物の保存修復、周辺整備、普及啓発、観光など多岐に亘る事業を担ってきた。多くの市民や関係者に支えられたことで、何とか乗り切った5年間でもある。これからの登録10年に向かい、調査研究で世界遺産の深み、厚みを作り、「継承」への道筋を構築する5年間となるであろう。そのためにこれまでを振り返ってみたい。

1 保存・整備の状況

(1) 高山社跡の保存整備

「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成資産の選定をきっかけとして、平成19(1997)年度に「高山社発祥の地」解説案内板設置。文化財保護課においては高山長五郎が養蚕改良高山社を組織した場所であることが重要で、且つ意味のあることとして「発祥の地」とした。平成20(2008)年世界遺産暫定リストに富岡製糸場と絹産業遺産群が記載され、高山社跡「高山社跡概要調査報告書」を刊行、国指定史跡の申請をし、平成21(2009)年度に国指定史跡「高山社跡」となり、指定標柱を設置した。平成22(2010)年度には高山家より敷地、建物を市が取得した。

こうした動きの中、平成22年度に史跡高山社跡保存整備計画策定委員会を発足し、「史跡高山社跡保存管理計画」策定を開始し、平成23(2011)年度に高山社跡の保存と管理に関する基本的な方針が定められた。こうして、世界遺産登録と保存修復へ向けての準備が進められるのである。

高山社跡保存整備事業では平成23年度の「史跡高山社跡保存管理計画」を基本に、平成24(2012)年度に「史跡高山社跡整備活用基本計画」を策定し、高山社跡史跡整備は高山分教場の盛行期、明治後半から大正期の姿に建造物を修復し、保存していく方針が打ち出されたのである。

高山社跡に現存する建造物は、主屋兼蚕室、長屋門、焚屋、外便所の4棟で、その他に桑貯蔵庫跡、建物跡が残されている。平成23(2011)年度に主屋兼蚕室北側の桑貯蔵庫跡と建物跡石垣の測量を実施した。また、主屋と長屋門の間の範囲で範囲確認調査を実施し、蚕室等建物痕跡の調査を実施したが具体的な建物痕跡は把握できなかった。

平成24(2012)年度に主屋兼蚕室の正面側サイディングを撤去、ケイカル板に張り替え、土壁のような雰囲気と景観を整えている。また、老朽化の激しい外便所と焚屋の屋根をシートで覆い、保護を図った。

平成25(2013)年度には「史跡高山社跡整備活用基本設計」を策定し、今後、建造物の保存修復を行うため、耐震診断を行い、文化庁と今後の保存修復と周辺整備についての協議を開始した。

平成26年6月に世界遺産リストに登録され、国指定史跡、世界遺産に相応しい往事の姿を末永く後世に伝え、見学できるように配慮するために本格的な保存修復に着手することになり、まず、老朽化著しい焚屋と外便所から保存修復に着手し、順次計画的に保存修復を実施している。

平成26(2014)年度は外便所・焚屋の保存修復に着手し、平成27(2015)年度に完了。同年度から平成30(2018)年度に長屋門保存修復を実施した。ところが、平成29(2017)年に長屋門の前、東側の石垣に大きな孕みが見られるようになり、一部では崩

*かるべ たつや・藤岡市教育委員会文化財保護課

壊の恐れがあるため、平成30（2019）年度から急遽、石垣修復を実施することとなり、令和2（2020）年度中に完了する予定で実施している。また、これまで保存修復耐震補強を実施した高山社跡の附属建屋（外便所・焚屋・長屋門）と石垣修復を合わせた保存修復報告書の作成も並行して実施しており、令和2年度末に刊行できる見込みである。

（焚屋・外便所）

平成26（2014）年度に焚屋・外便所修復設計を行い、続けて修復工事を実施。これに並行して長屋門修復工事設計、協議を行いながら実施している。焚屋・外便所の保存修復に関しては、小規模の建造物であることもあり、当初、1年程度の短期間で修復できると考えていた。しかし、解体等が進むにつれ、課題も多く、高山分教場時代の様々な痕跡が確認され、それらを修復や活用にフィードバックさせることが重要な課題となった。その一つが外便所の落書きである。外便所は3つの個室があり、それぞれの（座った時の）正面側に多量の鉛筆と筆による落書きが残されており、主に大正9（1920）年以降、大正14（1925）年頃までのものであることが判読する中で理解できた。落書きについては、多くの落書きに年号が描かれていることで、およそ書かれた年代が理解できる。問題は主に鉛筆書きで、多数が集中、重なっており、部分的に消えたり、消されたりするものなど、判別が不可能なものが多いことで、修復した後の土壁に模写やフィルムで復元することは不可能であった。そのため、写真撮影と赤外線撮影を行い、壁を切り取り、落書きをされている漆喰部分を外し、裏打ち補強を施して保存、一部展示することにした。また、壁の切り取りには壁の落書き面を不織布やエアセル等で養生し、両側をパネルで挟み、周囲をボルトで固定して壁を取外した。これは意外と成功で、壁は崩壊することなく外すことができたのである。その後、この方法でその後の各建物修復において土壁のサンプルを切り取り保存している。これにより、同じ建物でも部分によって異なる土壁の構成を断面で確認でき、重要な資料となっている。瓦についても窯印が確認でき、その生産者も確認で

きた。瓦については藤岡瓦（いぶし瓦）で、補修用の追加瓦については市内で唯一、達磨窯を運用している五十嵐清氏に藤岡瓦の復元焼成を実施した。その他、石組便槽も脆くなっていたため樹脂含浸補強も実施した。また、建物基礎の地業やドマの状況、精査、トレンチ調査など考古学的調査も並行して行った。

焚屋については風呂場の改修痕跡が現状までに4段階確認され、排煙、排水、洗い場などの変遷が辿れた。また、修復時に問題となったものは新たに補修に必要な建築部材で、基礎に使用された多胡石（牛伏砂岩）は、当時は盛んに採掘され、本地域では基礎石として多用されたものであるが、今日では採掘されておらず入手不可能なものである。焚屋煙突土管も現在では生産されていない規格のものであった。このような修復、交換部材の確保は今後の修復や保存維持にとっても重要な課題となるであろう。

（長屋門）

平成27（2015）年度から長屋門保存修復工事を開始し、課題や予算の都合もあり、平成30（2018）年10月までの約3年間の期間を要した。当初半解体で実施する予定であったが、土壁を外したところ、虫害腐朽がかなりの範囲におよんでおり、最終的には全解体で実施することとなった。実施に際しては覆屋の下部にアクリル板を張って、作業状況が見れるよう配慮し、ボードに工事内容を書き、修復工事も見学できるようにした。

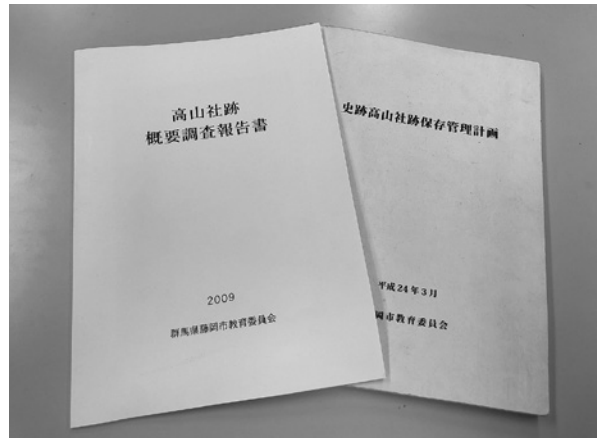
屋根の解体では、瓦下地にササイタが葺かれており、傷みが激しいことと昭和期の防水用ルーフィングがあり、屋根修復が数回想定された。ササイタはクリ材で、全体の約2/3が腐朽で交換が必要となった。交換用ササイタは、職人が既に少数となり現状では入手が難しいことから経験職人の手ほどきを受けながら、クリ原木からササイタ製作を記録しながら実施した。工程は丸太をミカン割に分割し、蒸し器で蒸し上げて、幅広の鉋状の専用工具で剥ぎ取るように厚さ5mm程度の板をはぎ取って、ササイタを作成するもので、記録をすることで今後の修理にも活用できるようにした。建物の軸組では大きく



高山社跡に残る建物群



「高山社発祥の地」の解説案内板（現在は無い）



高山社跡概要調査報告書・史跡高山社跡保存管理計画



ICOMOS専門委員の現地調査



世界遺産登録イベント（平成26年6月21日）

2回以上の修復が確認でき、門周辺はケヤキ、根太はクリ、柱正面側にはツガ、裏側はスギ、梁はマツなど部位によって使い分けられているが、ツガ材については現在輸入材に変わってしまい、国産のツガは入手困難な状況であったが、幸い入手することができた。

痕跡調査は部材のホゾなど調査も実施しているが、屋根が外され、明るくなることで、墨書や落書きなどが多く発見された。特に西側の部屋では多く残されていた。そのため、軸組みが残る段階で赤外線カメラを使用して墨書、落書きの調査を実施した。墨書の多くは大工の番付記号が多く、西部屋では養蚕に係わる収穫高の計算などが数か所見られた。中でも柱に遺された「高山分教場 壹號室」は発見であった。このように明るく照らされ、さらに赤外線カメラを使用することで、今まで確認できなかった墨書や落書きが多く残されていることが判明した。今後の修復においてもこれらの確認は重要作業であると考えられる。

また、長屋門の両側門柱に祈禱札が貼付られているのを確認した。この祈禱札は向って右側に1カ所1枚、左側に2カ所、2枚と11枚の合計14枚が確認され、ほぼ札の年号順に重ねられていた。中でも貞享4（1687）年の札が2枚あり、長屋門の年代が当初言われていた江戸時代末頃の築年代が大幅に遡る可能性が出てきた。平成30（2019）年度に長屋門の柱部材について、放射性炭素年代測定をウイグルマッチング法（暦年校正と年輪年代の相互行う）で実施し、1663～1680 cal ADの年代が示されており、ほぼ祈禱札の年代に一致する結果が出ている。一方、ドマについてはトレンチ調査等考古学的な手法で調査を実施し、ドマに多数の焼土痕跡を確認できた。

長屋門の西側でカンソウバと呼ばれていた場所では、殺蛹繭乾燥施設の下部遺構が発見され、記録し、遺存状態が悪いことから養生、埋戻して保存した。現在は解説板を設置して、位置と内容を解説している。

（長屋門前石垣）

石垣の修復は平成29（2017）年に排水口の付近に

大きな孕みが見られるようになり、一部では崩壊の恐れがあるため、平成30（2019）年度から令和2（2020）年度中に完了予定で実施している。石垣については3D測量を行い、詳細な位置データと石積みの状況を把握し、解体範囲を検証し、石の積み直しを実施している。石積みの状況は各所で石の積み方や石材の大きさなどが異なっており、それらについて検証し、大きく4段階の積み直しが行われていることが判明し、過去に大きな崩壊があったと想定された。石の積み直しについては、石を解体前と同じ位置に全て戻す形で実施している。また、石垣では高山社跡保存整備計画策定委員会の委員先生のほかに北野博司氏（東北芸術工科大）の指導を受け、実施している。また、令和元（2020）年度長屋門西側の老朽化したブロック塀も撤去、建仁寺垣を復元している。

（2）高山社跡の周辺整備

高山社跡周辺整備事業では平成24（2012）年度「高山社跡周辺整備基本計画」に基づき、平成25（2013）年度に周辺整備実施計画を策定し、高まる世界遺産登録への期待、また、世界遺産登録後に多くの来訪者が訪れることが想定できることから、見学来訪者対応を早急に実施する必要に迫られていた。同年度に高山社跡前に管理と便益を兼ねた施設「管理便所棟」と高山社跡の手前約500mの駐車場（北側駐車場）に設置するトイレの実施設計、並行して三名川対岸の（仮称）高山公園の用地測量、管理便所棟、駐車場用地買収など、続いて管理便所棟、駐車場、駐車場トイレ工事を実施した。また、遊歩道の設置を開始した。高山社跡周辺整備に本格的に着手したのである。

一方、藤岡市では群馬県に県道下日野神田線 拡幅、電線地中化、広域案内看板設置等を要望し、群馬県藤岡土木事務所ではまず、高山社跡前の県道下日野神田線の側溝整備を実施した。

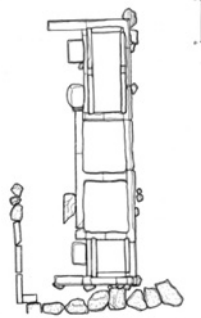
高山社跡の周辺は、藤岡地域の農村原風景が残る山間地で、道路も狭く、谷間で平坦な土地が狭く、駐車場やトイレを設置する場所の確保が重要な課題であった。



外便所（修復前）



外便所（修復後）



外便所の石組便槽（東側部分）・全体図



外便所の落書き（東側の内部）



焚屋（修復前・北側より）



焚屋（修復後・南側より）

周辺整備計画では三名川の対岸にガイダンス施設等設置が検討され、駐車場の位置についても議論された。こうして駐車場の位置が明確にされる中、用地確保、交渉を並行していった。ここで課題となったことは駐車場から高山社跡までの来訪者の歩行ルートであった。高山社跡前は県道神田高山線で、道路幅員が狭く、歩道は設置困難であり、安全に来訪者を資産へ誘導するため、様々な検討がなされ、道沿いの集落の裏に歩道を作る案、対岸に遊歩道を設置する案などが検討された。結果的に三名川の対岸に遊歩道を設置する案に落ち着いた。しかし、遊歩道設置場所については長年放置された竹林で、侵入することさえ困難な場所であった。平成25年度後半からまず、用地の確保と測量を実施。竹林伐採を実施した。この竹林伐採でも課題が多く、まず、伐採や放置された竹の処分について、受け入れ先が近隣にないことと竹の根の取り扱いであった。特に竹の根は、残るとそこから竹が生え、歩道を破壊する可能性があり、そのメンテナンス管理をどうするかである。また、重要な課題に三名川対岸に遊歩道を設置した場合、高山社跡の付近で再び渡河しなくてはならないため、新たに橋を設置する必要があるのである。三名川の渡河地点の検討は世界遺産の景観に影響があること、また、農業用水の取水口の関連で、橋の設置にも制限があることである。整備計画策定委員会では3案を検討し、文化庁協議を経て位置を決定した。しかし、一般的には橋梁設置は設計も含め計画から建設工事まで最短で2～3年かかるものであるため、来訪者の殺到する世界遺産登録予定年の平成26（2014）年春までには設置が困難であるとされた。このような中、高山社跡前の管理便所棟の建設も並行して、これらの問題点は関係者協力でなんとか解決し、平成26年6月の世界遺産登録を迎えることができたのである。

平成26（2014）年度は新白塩橋橋梁下部工工事、三名川対岸の公園広場の設計、用地取得等を行った。平成27（2015）年度は新白塩橋上部工工事、三名川対岸の（仮称）高山公園整備（高山社跡交流センター）、ガイダンス施設（高山社情報館）建設を行った。平成30年人道橋実施設計、令和元（2020）年3月に

人道橋の掛け替え本設工事が完了し、ほぼ周辺整備を完了した。世界遺産「高山社跡」の周辺インフラ整備による見学等の利用利便性の向上を図った。

2 調査・研究の状況

高山社の調査研究は群馬県史編纂の調査のほか平成3（1991）年から平成12（2000）年までの藤岡市史の調査、平成3（1999）年星和彦・井上昌美・松浦利隆氏らによる「近代養蚕農家の研究Ⅰ」群馬県立博物館紀要第20号、平成14（2002）年松浦利隆氏「高山社創成期の研究」『ぐんま史料研究第18号』、平成19（2007）年宮崎俊弥氏『群馬県農業史・上』みやま文庫など先人の研究がある中、平成20（2008）年度に『高山社跡概要報告書』藤岡市、高山社を考える会・藤岡市観光協会、平成24（2012）年の『史跡高山社跡保存管理計画』が刊行されて以降、高山社を考える会調査部会と高山社に関わる人物調査が実施された。特に関口覚氏の精力的な研究により、平成31（2019）年『高山社の養蚕改革』として成果が公表されている。このように高山社の実態についての調査研究については、高山社を考える会調査部会を中心とした民間主導で実施されている。一方、平成25（2013）年村田敬一氏を中心に高山社関連養蚕農家建築の調査を実施し、『高山社と分教場 高山社の関連養蚕農家建築概要調査報告書』を刊行した。それ以降、公的な調査研究については研究体制が整っていないことがあり、群馬県立歴史博物館との協力のもと、平成11（1999）年に高山家から群馬県立歴史博物館へ寄贈された資料について内容の調査を随時行い、平成24（2012）年度に世界遺産課、群馬県立歴史博物館、藤岡市で高山社生徒名簿、派遣地についてデータ化し、平成27（2015）年に高山社社員名簿の撮影を行ったが、データ化には至っていない。また、その間、高山社跡の建造物の保存修復の進捗に伴い、保存修復に係る附属建屋の資料について調査を実施、考古学的な調査と必要部分の文献調査研究を行ってきた。その成果については令和2（2020）年度に刊行予定の保存修復調査報告書に掲載予定である。令和元（2019）年度に群馬県立歴



焚屋内部の風呂場（調査解体前）



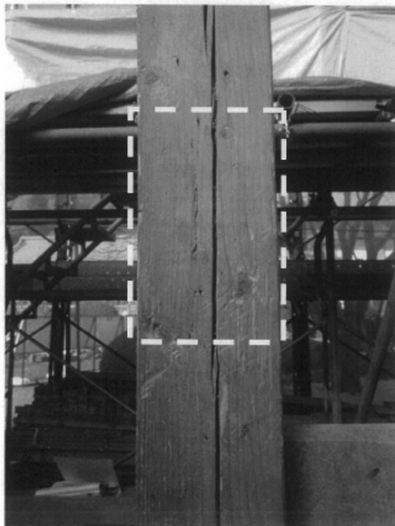
焚屋内部の風呂場（調査中・古い煙突等状態）



長屋門（修復前）



長屋門（修復後）



上写真の枠内赤外線画像
「高山分教場」
「壹號室」



柱の根元付近の鉛筆書き（横向き、写真右が上方向）
「大正拾四年度 第一期生 青山新乃助」
※高山社名簿データに大正14年度が無いため未確認

長屋門の西部屋に残された墨書・鉛筆落書き

史博物館との調査で、ガラス乾板50枚（資料番号S-8-177-1）を見出し、「明治期の養蚕風景」『群馬県立歴史博物館紀要第41号』として資料化を図った。今後も継続して、資料調査研究を実施する予定であるが、組織と人材の充実が不可避である。

3 普及・啓発活動の状況

普及啓発活動では高山社跡の来訪者に対して、平成21（2009）年度からアシスタントのガイドで観覧できるようになり。世界遺産登録の平成26（2014）年度以降は藤岡市の高山社跡解説員として実施している。

こうしたガイドによる高山社跡の価値の普及のほかにイベントによる普及啓発を行っている。世界遺産登録への機運を盛り上げるために平成25（2013）年5月から藤岡花交流館で「高山社跡パネル特別展」とまゆダーマンの推進キャラクター認証式、ポロシャツ製作、PRイベントなどを実施した。

平成26（2014）年6月20日21日にライブビューイングで世界遺産登録の場を市民と喜びを共有するため、世界遺産登録イベント開催。8月には藤岡まつりで、祝祭、世界遺産フェア。10月2日にはみかほみらい館で世界遺産登録祝祭イベントを開催。11月には市制60周年記念で、まんが「高山長五郎の生涯」を刊行配布した。また、高山社跡では6カ国語対応の高山社跡多言語ガイドシステムを構築。多言語対応化を実現した。一方、郷土学習として市内小中学校では「高山社学」を授業として実施して、子



高山社情報館

どもたちに郷土の歴史、絹文化を学習してもらっている。

平成27（2015）年度以降は、5月にイベントを開催してPR普及を毎年行っている。藤岡歴史館では平成21（2009）年「養蚕指導の妙技－高山社と分教場」をはじめ、夏や秋を中心に企画展示を開催し、併せて講演会を実施して普及啓発を行っている。平成31（2019）年4月には修復工事が完了した長屋門に展示室を設けて、公開展示を実施している。その他、PRグッズやポスターの製作など多岐に亘った啓発を行っている。

平成28（2016）年4月8日「高山社情報館」がオープンし、その後、3回の企画展「ある日の高山社」、「今に残る高山社写真展」、「没後100年町田菊次郎展」などや高山社跡フォトコンテストなどを実施。平成29（2017）年度では繭クラフト、織物体験錦絵上州新町驛紡績所及び版木公開、桑園探検など高山社の情報発信だけでなく、繭クラフトなどの体験を取り入



保存修復現地見学会



高山社学 ティーチャーズガイド



長屋門東部屋ドマ焼土範囲確認



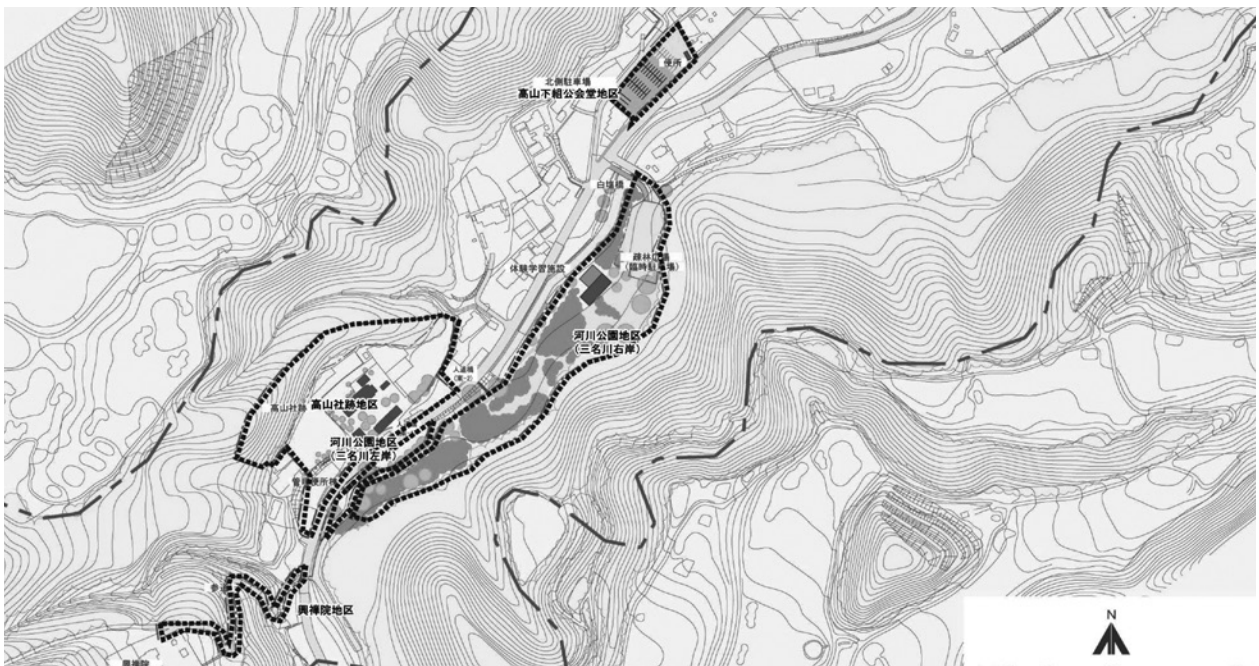
長屋門西部屋床下遺構状況



長屋門屋根の状況
(手前に昭和期のルーフィングがみえる)



長屋門西・繭殺蛹乾燥施設下部遺構



高山社跡周辺整備計画図



「ぐんまちゃん家」でPR活動するまゆダーマン

れた形を行った。

藤岡市は平成30（2018）年度に高山社交流センター、高山社情報館を文化財保護課から商工観光課へ移し、観光拠点の役割強化を行っている。また、平成31年4月1日から一般観覧料500円を徴収し、維持管理等の資金の一部に充当する事になった。この観覧料の徴収に当たって、入場券にかつての高山社蚕業学校入学証、同卒業証、高山社社員証をデザイン化して、3段階に交付することで楽しみながらリピーターを増やすことを目論んだ入場券を制作している。

4 登録後5年間の成果と今後の課題について

登録前後、高山社の業績の普及啓発を展開し、今や市民で知らない人がいないぐらいまでになってきた。また、市内小中学校で郷土学習の一貫で高山社学を実施しており、子どもたちが高山社に触れることでの絹文化継承が実現している。周辺整備についても人道橋本設工事が完了し、一応の周辺整備も完了したところで、来訪者の利便性も向上している。一方、高山社跡では説明の多言語化を推進し、平成26（2014）年度にデジタルサイネージと6カ国語多言語解説システムを構築。平成30（2018）年度からデジタルコンテンツを構築し、高精細CGやVRなどの映像コンテンツを令和元（2019）年度までに構築した。本来であれば東京オリンピック2020、インバウンドに対応した高山社跡に多くの来訪者を期待したところではあるが、コロナ禍で、成果としては十

分とはならなかった。今後は史料についてのデジタルアーカイブ化を検討している。

平成29（2017）年度から3年間で市民を巻き込んだ「まちづくりシンポジウム」で高山社を活かしたまちづくりの推進を検討し、かがやきプロジェクトとして提言書をまとめた『まちづくりシンポジウム2020』藤岡市まちづくり実行委員会。この提言によって市民や行政、団体が実行実現できる提案を実施することで、藤岡独自の高山社の活かし方が具現化できると考えており、令和2（2020）年度では床の間展覧会、蚕蛾とアサギマダラとの対比など、コロナ禍ではあるが、一歩ずつ進められてきているのである。市民レベルで、今後の高山社跡継承を牽引していくものと期待したい。

保存修復工事では令和3（2021）年度から高山社に残る4棟の内、唯一保存修復の済んでいない主屋兼蚕室の保存修復を開始し、初年度は解体調査を実施する予定である。今までの3棟の保存修復の経験を活かし、この調査では建物の痕跡調査以外にも高山社の清温育のモデル構造の調査と床下に残る囲炉裏跡やドマなどの調査などの実態が解明されることが期待される。

調査研究では市の調査研究体制が困難な状況で、県立世界遺産センター「セカイト」の活動や世界遺産研究の担い手育成が重要な課題であり、シルクカントリーぐんまで実施している調査研究事業「絹ラボ」への期待は大きい。世界遺産の継続的な保存継承、調査研究を図るには行政組織充実と群馬県、世界遺産センターとの連携は不可欠ではあるが特に担当者、研究の担い手の育成は急務である。



「まちづくりシンポジウム」かがやきプロジェクト
飛べる蝶と飛べない蝶（高山社跡アサギマダラ飛来）